

## 第4章 考察－鷹巣古墳群と周辺の埴輪－

鷹巣古墳群の埴輪は、(片倉 1941、志間 1972、片倉・後藤・中橋 1976、今津ほか 1988、藤沢 2002、東影 2008・2009) などにより既に研究・報告されているが、部分的であり全体的な検討はなされていなかった。本章では、鷹巣古墳群を中心に白石市・蔵王町域出土の円筒埴輪について特徴をまとめ、比較を行うものである<sup>1)</sup>。

### 第1節 鷹巣古墳群の埴輪

鷹巣古墳群における埴輪が出土した古墳は、瓶ヶ盛古墳(鷹巣 12 号墳)・鷹巣 18 号墳・経塚山古墳(鷹巣 36 号墳) の 3 基である<sup>2)</sup>。

(1)瓶ヶ盛古墳(鷹巣 12 号墳) 墳長 56 m、後円部 2 段築成の前方後円墳で、円筒埴輪および鳥形埴輪(水鳥・鶏)が採集されている(志間 1972)。

円筒埴輪の外表面調整は、2 次ヨコハケが主体を占めるが、少量の 1 次タテハケも存在する。特に、底部外表面に 2 次ヨコハケを施すなど丁寧な調整がなされている。2 次ヨコハケには、静止痕が確認できないが、揺らぎ回転力が弱く B 種ヨコハケに近い(東影 2009)、回転台を用いない連続ヨコハケといえる。また底部凸帯の剥離面からは、2 条凹線による凸帯設定技法が確認できる<sup>3)</sup>。基部は、粘土帯 2 枚をつなぎあわせ成形している。

(2)鷹巣 18 号墳 箱式石棺を内部主体にもつ直径 22 m の円墳で、1971 年の調査時に円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土している(志間 1972)。また戦前にも、底径 25.5cm、底部高 13cm を測る円筒埴輪の底部資料が報告されている(片倉 1941)。

円筒埴輪の外表面調整は、2 次調整 B 種ヨコハケあるいは連続ヨコハケが施され、底部のみ 1 次タテハケである。静止痕の切り合いから Bb 種ヨコハケに分類できる埴輪片も存在する。口縁部は、内面にもヨコハケが施され、口唇に向かって外傾している。

朝顔形埴輪は、内外面にハケ・ナデ調整が施され、偽口縁部分には端部から内面にかけて刻みを入れている。図 31-6 は、頸部凸帯直上から屈曲部凸帯直下までであり、両凸帯の間隔は推定約 8cm 程度である。

(3)経塚山古墳(鷹巣 36 号墳) 直径 24 m の円墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪が採集されている(片倉 1941・片倉・後藤・中橋 1976)。

円筒埴輪の外表面調整は、体部が B 種ヨコハケであるのに対し、底部は 1 次タテハケのみである。また、基部は粘土帯 1 枚によって成形され、底端部の最大器厚が 4.8cm と肥大している。底部外表面には、連続する斜め方向の圧痕が確認でき、板端圧痕と認められる。板端圧痕は、板押圧による凸帯貼り付け時に器面に残される痕跡である(藤沢 2003)。なお、凸帯剥離面からは、凸帯設定技法の痕跡を確認できなかった。

朝顔形埴輪は、屈曲部から口縁部にかけて、内外面にハケ調整が施されている。

## 第2節 亀田1号墳・志在家遺跡の埴輪

白石市内には、鷹巣古墳群以外に亀田1号墳・志在家遺跡より埴輪が確認されている。

### (1) 亀田1号墳埴輪の経緯

今回報告される亀田1号墳の2点の円筒埴輪片は、福島大学行政政策学類考古学研究室に保管される資料で、考古学同人組織の土筆舎による採集品である。本資料は、土筆舎のご厚意により先年菊地に寄託され、勤務する福島大学で研究資料として保管していたものであるが、このたび白石市教育委員会および大栗行貴氏の要請により参考資料に供することとした。掲載をお認めいただいた土筆舎には心よりお礼を申し上げたい。

土筆舎のメモによれば、本資料は1986年に亀田古墳群の主墳である帆立貝墳（亀田1号墳）の後円部中間テラス付近で採集されたものである。『宮城県史』には、本古墳から埴輪が採集されることが記されており（志間1981）、一部関係者には埴輪をもつ古墳と知られていたが、これまで埴輪の実測図や拓本が刊行物等に掲載されたことはなかったものとみられる。本資料の公表が白石市および周辺地域の歴史復元や考古学研究の進展にわずかながらでも寄与するものとなれば幸いである。（菊地芳朗）

(2) 亀田1号墳の埴輪 亀田古墳群は、瓶ヶ盛古墳（鷹巣12号墳）から南へ約3.4kmの白石市斎川字弥平田に所在する丘陵上に立地し、帆立貝墳1基と円墳4基で構成する。埴輪が出土しているのは、墳長44mの帆立貝墳である亀田1号墳のみである。外面調整は2次調整B種ヨコハケ、内面調整はユビナデが施されている。

(3) 志在家遺跡 瓶ヶ盛古墳（鷹巣12号墳）から南へ約2kmの白石市大鷹沢三沢字前輪に所在し、2009年の調査時に表土から埴輪片1片が出土している（日下2010）。

埴輪は、外面調整1次タテハケ、内面調整ユビナデが施されている。上端部には、ヨコナデと若干の立ち上がりを確認できることから、凸帯部に続く箇所と考えられる。

埴輪に伴う遺構は発見されていないが、周辺に古墳あるいは埴輪窯の存在も想定される。

## 第3節 蔵王町の埴輪

蔵王町では、宗膳堂古墳と天王古墳の2基から埴輪が採集されている<sup>4)</sup>。

(1) 宗膳堂古墳 蔵王町大字塩沢字戸ノ内脇に所在し、丘陵麓に立地する。直径35mの円墳で、円筒埴輪と朝顔形埴輪が採集されている（片倉・後藤・中橋1976・中橋1987）。

円筒埴輪は、外面調整1次タテハケで、赤彩が塗布された資料も含む。また、形態全体的に外傾する形態をとり、口唇部ではやや強いヨコナデにより外反する。また、口唇部の内面調整には、ヨコハケの後にタテ方向のユビナデ調整が施されている。胎土に海綿状骨針を含んでいる特徴をもつ。なお、凸帯剥離面からは、凸帯設定技法の痕跡を確認できなかった。

朝顔形埴輪は、頸部片のみだが1点確認した。

(2) 天王古墳 蔵王町大字塩沢字天王に所在し、丘陵斜面に立地する。現存する直径23mの円墳のほか3基以上の同規模円墳（削平）が確認され古墳群を構成している（中橋1987）。埴輪は、現存する古墳（天王古墳）から採集されたものと考えられる。

図示できたのは、埴輪片1点のみである。外面調整は、1次タテハケで胎土に海綿状骨針を含むなど、宗膳堂古墳の埴輪と類似している。このことから、内面調整のヨコハケの後にタテ方向のユビナデが施される破片は、円筒埴輪の口唇部に近い口縁部資料であると考えられる。

#### 第4節 まとめ

鷹巣古墳群と周辺古墳の埴輪の特徴を述べた。以下で比較を行いたい。

鷹巣古墳群および亀田1号墳の埴輪は、2次ヨコハケの外面調整が施されている。瓶ヶ盛古墳の埴輪は、底部外面にまで2次調整を施し、古い様相を示す。一方、経塚山古墳は、底径の縮小や底部調整が粗雑であることから相対的に新しい。鷹巣古墳群における埴輪生産が同一工人によるものと仮定すれば、埴輪生産を瓶ヶ盛古墳→鷹巣18号墳→経塚山古墳の順と考えられる。なお、亀田1号墳も3古墳と並行し、いずれも古墳時代中期中葉の時期に該当する。また、2条の凹線による凸帯設定技法・板押圧による凸帯貼り付け技法などの製作技法についても確認した。このような技法は、阿武隈川流域の鱸沼古墳（宮城県角田市）・国見八幡塚古墳（福島県国見町）・谷地古墳（福島県大玉村）・金山古墳（同）・大善寺古墳群（福島県郡山市）などの阿武隈川流域の埴輪に類似する。

蔵王町の埴輪は、外面調整1次タテハケや口縁部内面の調整、胎土に海綿状骨針を含むことが共通する。さらに、宗膳堂古墳の埴輪は、口唇部で外反する形態や赤彩の特徴をもつ。これらは、仙台平野における「富沢窯跡系列」（藤沢1987）の埴輪と類似する。また、宗膳堂古墳の埴輪を富沢窯跡系列もしくは、それに類似する埴輪とした（藤沢2002）の指摘を補強するものである。埴輪の年代は、同系列の継続期間である古墳時代中期中葉から後葉と考えられる。今後、外表施設も含めた仙台平野の古墳との比較が必要である。

白石市・蔵王町域は近接する地域であるが、埴輪においては技法・胎土の多くで相違点を見出すことができ、それぞれ阿武隈川流域と仙台平野の埴輪に類似することが明らかになった。このことから、2系統の埴輪生産が同地域に展開されたと考えられる。

- 
- 1) 資料は、亀田1号墳採集埴輪を福島大学考古学研究室、それ以外の埴輪を白石市教育委員会が保管している。
  - 2) 鷹巣13号墳の調査時にも埴輪が出土しているが、出土状況から13号墳に伴うものではない（宮城県教育委員会1967）。また、鷹巣古墳群に近接する蛭賀屋敷遺跡では、埴輪片が1点出土し（日下・櫻井2009）、古墳群に由来すると考えられる。
  - 3) 辻川哲朗氏御教示
  - 4) 都遺跡でも埴輪が出土するとされる（白石市史編さん委員1976）が、確認できない。